

## 会員の声

## 会員の声へのお答え

イワタ ヒデキ  
岩田 英樹\*

日本公衆衛生雑誌 2023; 70(3): 207. doi:10.11236/jph.22-118

本誌第69巻第3号に掲載された「同世代の友達からの飲酒と喫煙の誘いに対する高校生の断り方」に対してコメントをいただきましたので、お答え申し上げます。

表1-2 対象者の状況(学科別)のご指摘に関して、初回投稿時は、対象者の状況を男女別の結果(表1-1)のみで掲載した表としていました。査読過程において、普通科と工業高校での喫煙や飲酒の割合について示すこと、および、その結果に応じては多変量ロジスティック回帰分析で学科別でも調整を行うよう査読者からご指摘を受けた経緯があります。この査読者からのご指摘については、本研究での対象者が比率抽出されたものではなく、協力の得られた高校に在籍する生徒であったため、学科という所属層別での差異について示すと共に、その結果に応じて必要があれば多変量解析で調整すべきであるというもので、道理に適っていると考えました。

それゆえ、学科別で対象者の状況を分析したところ、喫煙や飲酒の割合の他、誘いを断る自己効力、間接的な社会的影響の全てで有意差があることが確認できました。これを受けて、多変量ロジスティック回帰分析においても学科別を調整変数に加えて再分析を行いました。こうした修正作業を終えて、表1-2を追加し、合わせて表3での再分析を掲載することにしました。

ただ、本研究の目的は、日本の高校生を対象に、飲酒と喫煙の誘いに対する断り方の特徴、および現在飲酒、現在喫煙との関連について明らかにすることであり、投稿者のご指摘のとおり「高校の種別による差異や効果的な取り組みを開発すること」ではありません。ですので、表1-2では結果を事実とし

て示すに留め、それに関わる考察も行いませんでした。このことは、本研究の結論を解釈する上で最低限必要な情報であったと考えております。

また、「研究で生じる集団の被害」への配慮の必要性や、その一例として Foulks の文献<sup>1)</sup>を紹介いただき、大変勉強になりました。ただ、先住民族イヌピアットの事例は、彼らにアルコール依存症が多いという主旨の論文が発表されたこと以外にも、当時の様々な社会状況が重層的に影響し合っていたことが指摘<sup>1)</sup>されています。これに比して、本研究が同様の「不用意な結果を生む可能性」はほとんどないものと考えております。さらには、論文全体として、本誌の読者に工業高校に通う生徒に対する誤った印象を与えるような可能性もほとんどないのではないかと思います。

とは言え、「公衆衛生において社会的な階層を考慮することは重要であり、一方でその解釈について十分配慮することが求められる」という点は、投稿者のご指摘のとおりと思われます。次回以降の研究で生かしていきたいと考えております。この度は有益なご意見をいただき大変勉強になりました。誠にありがとうございました。

本原稿に関して開示すべき COI はない。

|             |             |
|-------------|-------------|
| 受付          | 2022.11.28) |
| 採用          | 2022.12. 7) |
| J-STAGE早期公開 | 2023. 2.10) |

## 文 献

- 1) Foulks EF. Misalliances in the Barrow Alcohol Study. Am Indian Alsk Nativ Ment Health Res 1989; 2: 7-17.

\* 金沢大学人間社会学域  
責任著者連絡先: 〒920-1192 金沢市角間町  
金沢大学人間社会学域 岩田英樹